龍谷大学アジア仏教文化研究センター　ワーキングペーパー
No.17-06（2018年3月31日）
研究論文

龍谷大学図書館蔵
「【寄託本】　大谷光瑞師書簡」について

市川良文

（龍谷大学文学部准教授）

目次

１．はじめに
２．資料の概要
３．書簡の内容
４．明治末期から大正初期の日本における中央アジア探険熱
５．おわりに

【キーワード】
大谷光瑞　吉川小一郎　スウェン・ヘディン　ウイグル語研究　中央アジア探険

1．はじめに

現在，龍谷大学大宮図書館に保管される大谷探検隊関連資料の中には，吉川家寄託資料として「【寄託本】　大谷光瑞師書簡」（以下「書簡」）が含まれている。管見のかぎりでは，この「書簡」はこれまでに2回展観等に出陳されている。1度目は「龍谷大学大宮図書館2010年度春季特別展観　大谷探検隊展―将来品と個人コレクション」展（会期2010年5月20日～27日）であり，2度目は「特別展　二楽荘と大谷探検隊―シルクロード研究の原点と隊員たちの思い―」展（会期2014年10月4日～11月30日）である。この両展観において，この「書簡」は「大谷光瑞師の都市計画に関する構想を記した書簡などがある。二楽荘用紙と記された専用の便箋が使用されている」[1]，「現地調査中に吉川小一郎に送付された書簡で，帰国後の指示などが記されている」[2]と紹介されている。しかし，これらの紹介は，実はその内容を全く反映していない誤った紹介記事であり，資料の性格からか，あるいはその内容からか，従来その内容については周知されていないように思われる。そこで本稿では，「書簡」の内容を紹介し，併せてその内容について若干の検討を試みることとしたい。



2010年展観図録p.51より

2．資料の概要

前述の通り，この「書簡」は「【寄託本】　大谷光瑞師書簡」として保管されている[3]。寄託資料のため請求記号などは附されていない。

「書簡」は2通からなっているが，現状では軸装されて一巻物となっている。本稿では，便宜上軸装されている順に「書簡1」，「書簡2」と称することとする。

「書簡1」は青罫が引かれる。天地の界線はなく，上部に区切り線と「二楽荘用紙」の文字が印刷されている。罫線は左右両端が二重線，各行間は点線となっている。一紙11行となっているが，軸装の際に各紙が張り合わされており，一紙のサイズは判然としない。左枠外に「明治四十　年　月　日　　石

[1] 龍谷大学大宮図書館篇『龍谷大学大宮図書館2010年度春季特別展観　大谷探検隊展―将来品と個人コレクション―』（龍谷大学大宮図書館，2010年5月，以下2010年展観図録と略称）p.51より引用。
[2] 龍谷ミュージアム編『特別展　二楽荘と大谷探検隊―シルクロード研究の原点と隊員たちの思い―』（龍谷大学龍谷ミュージアム，2014年10月4日，以下2014年展観図録と略称）p.185より引用。
[3] 同資料に添えられた紙片には，「大谷光瑞師より，新疆の吉川小一郎に送られた書簡　後に小一郎が自身で表装したものと思う　静子さん」と記されている。



2014年展観図録 p.185 より

垣印行部」と印刷されていたことが，第六葉（書簡末尾）によって確認される。空白行（4行）を含む全行数は67行で縦書き。「書簡1」全体の大きさは，81.5cm×23.5cmである。

「書簡2」は赤罫が引かれ，上部に下がり藤紋が印刷されている。赤罫は外枠が子持罫となっており，各行間は実線となっている。一紙11行となっている。「書簡1」同様に軸装の際各紙が張り合わされ，一紙のサイズは判然としない。「書簡1」同様六葉からなっている。空白行（5行）を含む全行数は66行で縦書き。「書簡2」の全体の大きさは，76.5cm×24.0cmである。

両書簡とも，その内容から第三次探検中の吉川小一郎に宛てて送付された書簡と思われるが，差し出された年月日は不明で，封筒などは存在していない。送付された年月日について，便箋から得られる手がかりは，「書簡1」の左枠外にある「明治四十　年　月日」の印刷のみである。

3．書簡の内容

それぞれの書簡について，以下に内容の録文を示す[4]。各葉間は点線で示す。●は原書簡での訂正箇所である。

「書簡1」

橘帰朝後日々発掘品整理ト各地講演
ニ多忙ヲ極メ特ニ十七八両日ノ東京講演ハ

是

大喝采テ非常ノ好成績ヲ得タリ●ニツキ

[4] 一部難読箇所について，東海大学の片山章雄教授より御示教を得た。特に記して謝意を表したい。勿論文責は筆者にある。

愈先日モ命シタル如ク土耳古語ノ学者ノ
ケ
必要益モ急ヲ告●日々橘ヲ譴責ニ及ヘ
トモ如何トモスヘカラス目下日本ノ学者間ノ
新疆熱ニハ非常ニシテ従テ学者ノ土ルコ語ノ
研究モ旺盛ヲ極ムルアリ当方ニ完全ナ
ル土耳古人ノ学者カ居ラ子ハ一日モ安全ニ日
本ノ学者ヲヘコマス事ハテキス危険千万ニ

ツキ可否ヲ論スル場合ニアラスソレ●故橘ヲ詰問
ニ及ヒ左ノ如ク定ム

一和闐（ホーテン）ユスフ
コルワンベキ兄弟
コレハ先日モ書面ニテ申送リシ分ナリユスフトコルワン
ベキ兄弟ト三名トモ是非入用一人ニテハ不可ナリ
一人カ読メハ一人カ書キ或ハ写シナトスル故三名
トモ入用ナリ
二ルクチン（トロハンノ南）ルクチン王ノ通弁ヲナセルモノ
コレハ多分困難ナランモ学力ハコノ人カ非常

高キヨシナリ再三王ノ随行ヲシテ北京ニ行キ事
アリ
三トロハン　李ノ承知セル大学者ニシテ巡撫ノ
トルコ語ノ教師タリシモノナリ
四コルラ　大アホンノ弟子

ソノ他ホーテンノバトルヂン（英國ノ郷約）ノ子息カ
年齢ニ似サル学力ヲ有スルモ健康不良故
到底不可ナルヘシト橘ハ云ヘリ
アクスクツチヤニモ学者ハアルヘシト思ヘモ橘ノ知
ラヌ故汝調査スヘシ

第一ハホーテン[5]ノユスフトコルワンベキ兄弟ノ三人
ナリコレハ如何ニシテ必用ナレハ十分ノ力ヲ盡スヘシ
猶ルクチンニアフス[6]ト云フモノアリコレモヤヽ字ヲ

---

[5] 原書簡では右側に傍線が引かれている。

知ルモノナリト云フ橘ノ忠僕ト同名異人ナリ
トルコ語ノ研究ニハ一人ヤ二人テハ時間ハカリ費ヘテ
役ニタヽス少ナクモ四五名ハ必用ナレハ第一ニホーテン
ノ三名ヲ極力召喚シソノ上テキルナラハ其他ヲ集
ムヘシ多キハ少ナキヨリ可ナリ小輩モ必要ナリ字
ノカケヌヤツハ不可ナリ幾多ノ文書ノ書写セシムル
ニハ数名ノ小輩カナケレハ学者ハカリテハ事ハコハス
学者ハ橘ト對手ニナリ飜訳等スカヽリ

小輩ハ写字ニ使用スルツモリナリコレハ学者ト異
ヒ事容為ナレハ字ノ書キウル程度ニシテ探索
セヨ
成ヘク速カニ送付セヨ當方ノ危険ハ非常ナリ
一日モ急ヲ要ス
発掘品ノ價格ハ完全ナル経巻ナレハ驚クヘキ
モノナリ唐代ニシテ年号入リナレハ一千円ヨリ
低キモノ●ナシドモ〳〵購入セヨ
タチハナト最后ニ発掘セシチキトムノ回鶻城
ハウイクルノ書多シ●猶数回発掘セヨ
今回ハウイクルノ完全●ナルモノナキ為大ニ

失望セリトロハン辺土人ノ所有セルモノヲ買求
メ完全ナルウイクル経巻ヲ送レ
敦煌ノ写経ハ東京ニテ非常ノ好評ナリ
繪画モ非常ナモノナリ大ニ買集メ探索スヘシ
又探検熱カ東京ニテ上騰セル故油断ハ
少シモテキヌ全力ヲツクセ

三

ユスフコルワンベキ兄弟●人カ當方ヘ着セ子ハ
子子ヘハ金ヲ送ラヌソ　金ハ天拝ト
心得フヘシ三人ノ中一人缺タラ三千円ノ中一
千円減額スルモノト心得ヘシ
以上

---

[6] 同上。



【寄託本】　大谷光瑞師書簡　「書簡 1」

「書簡 2」

新疆追々不穏トナリ愉快ナ年ナリ不穏ニナレハ成ル
程探検隊ノ出発スルカ遅クナル汝モ報告ヲ誇大
ニシテ日本探検隊ノ恐怖スルヨウニ時々報告ヲナス
ヘシ都ノ方ハ新聞ニ出シ人ノ膽ヲ寒カラシムルニ力ム
ル然レハ●當分探検隊ハ恐レテ出来ラサルヘシ近来
日本ニ於ケル新疆探検熱ハ非常ナレバコレヲ鎮
ムル薬剤ハ唯不穏報告ノミナレハ汝ノ方ヨリモ
続々不穏報告ヲ送付スヘシ
次ニ本年度ノ探検區域ハ橘ト相談
ノ結果左ノ如ク定ム

ウルムチヨリ天山ボグド峯ノ植物採集ヲ終リ
コレヲ露国領事館ノ園丁ニ金ヲヤリ保完
ヲタノミ而シテ古城子ニ向フヘシコノ附近ニ
済木薩アリコレハ北庭ノ遺跡ナリコノ南天山ノ
渓谷ノ中ニハ必ラス穴寺アルヘシコレヲ探索セヨ意
外ノ獲物アルヘシコノ地点ハ外国人未●発掘ノ
●処ナリ北庭遺趾ノ北ノ沙漠ニモ多少残
留アルヘシ北庭ヨリ南トロハントノ間天山ヲ超ル
カ唐時ノ大道ナリ今日ノウルムチトトロハン間ノ大道ノ
如キモノナリ故ニチムザヨリ天山ヲサグリ〳〵上テ
トロハンニ超ヘ又直チニ同シ道路カ附近ノヤヽチカツタ

道ヲチムサニ引返シ真性ノ唐ノ大道ヲ発見セハ

必ス意外ノ獲物アルヘシ而シテ東行巴里坤ニ
行キコノ附近ヲ探索シ天山ヲ超ヘ哈密ニ行クヘシ
哈密ニテ正月頃マテ滞在コノ附近ヲ大探索シ終
レハ直チニ西行シトロハンニ至ルヘシ大道ハヤヽ北方ニ迂回セリ
唐時ノ道ハ今日ヨリ南方ニアリテ哈密ヨリ直西ニ向ヘリ
一沙漠アリコレヲ通過セルカ如シコレヲ大体終了
連絡ハ日本トハウルムチノ露国領事館ト定ムヘシ物
品モ金銭モ郵便モ然リコレヲ相問スヘシ
次ニ李送還ノ件・コレハ大事件ナリ先便ニ云フカ如ク

本国ノ方カ大危険故実ニ困難ナリ時期ヲ見
荷物ニ盡ク露国ノ旗ヲ上ケ俄国人ノ荷物ナリ
ト称シ北京ノ露国公使館ニ行カ如ク揚言シ途
中モ支那人等ニ強盗ノ贋(おそれ)アレハ露国ノ騎兵カ
直チニ襲来シテ汝等首ヲ飛ハス如ク云ヒツラヒ
露国ノ勢ヲカリ行クヨリ外ニ安全ノ策ナシ帰化
城以東カ最モ困難危険ナレトモ當方ニテ何
トカ保護ノ策ヲ講スヘシ尤モ帰化城張家口
間モ蒙古ヲ通過スル方安全ナリナルヘク長城ヨリ
北ニ遠カル程安全ナリ北方程無人故安全ナリ
随分困難ナル問題ナリ

次ニ学者ノ件ハ橘カツレテ帰ラサリシ為ウイゴル文
字モトルコ文字モ更ニワカラス甚不結果ニシテ
大ニ譴責ヲ加ヘタルモ如何トモ致方ナシ汝ハ十分
ニ探索シ送付スヘシトロハン人ハウイグル文字ヲ
讀ムニ必要ナル人ナリヤルカンドホーテン人ハトルコ文字
ヲ讀ムニ必要ナル人ナリ共ニ入用ナリ両三人居ラサレハ
事ノ辨スル能ハス橘ノ手紙ノ通リ迅速ニ処置シナル
ヘク李等ト共ニ送ルヘシ
ウイグル文字ノ研究ハ重大ナリコノ研究ノ前ニハ金銭モ
労力モ低廉ナリ外国人スラ未十分ニ研究セスコレヲ開クハ
我等ノ名誉ナリ汝ハ極力尽力シムノ上ウイグル文字

ノ発掘ニツトムヘシソノ他異体文字ハ十二分ノ
努力ヲ以テ拾ヒ集ムヘシ
二楽荘ハ現在ニテハ五百人程居住セリトルコ人ノ
十人ヤソコラハ何ラモナシ十分ニ人間ヲ探索シテ

送ルヘシ
二楽荘ノ現況ハ柱本ヨリ聞クヘシ
以上

子子



【寄託本】　大谷光瑞師書簡　「書簡 2」

4．明治末期から大正初期の日本における中央アジア探険熱

まず「書簡 1」に示される内容の検討から始めたい。

橘瑞超が第三次の調査を終え，日本に帰国したのは明治 45 年（1912）6 月 5 日のことであった。これについて，『教海一瀾』516 号（明治 45 年 6 月 15 日発行）は，彙報欄（pp.18-19）に，

◎橘瑞超氏の歸朝　既報の如く御内命に依り五ケ年間前後二中亞探檢の大旅行を試み，宗教上，歷史上，地理上，美術上，人種上に新らしき各種の材料を採取し身心健全，客月二十四日西伯利亞鐵道オムスク驛より乘車，滿州朝鮮を經て歸朝の途に就かれたる志勇院橘瑞超連枝は，釜山に於て斯波隨性氏其他の出迎を受け，本月四日早朝下之關に着，多數の歡迎を受けつゝ山陽ホテルに入りて休憩し，午前十時小倉に赴き梅上第五教團長を訪問，午後二時四十五分發列車にて，五日午前八時三十三分京都驛着歸京せられたり。同驛には兩親並に令弟を始め朝倉執行，足利佛教大學長，原田執行所賛事長，癡山内布賛事長，上原室内部長，堀通報所長，内田，吉村兩課長其他親授稟授等各役員多數の出迎あり。歸京後直に嗣法猊下御會見の後ち兩堂に參拜せられ，錦華殿にて下餐あり同日午後二時十五分京都驛發にて二樂荘に伺候，大法主猊下の接見あり，復命の後ち同荘に於て催ふしの歡迎會に臨まれたり。而して同宴會には本山より足利學長，原田賛事長，堀通報所長，茂野賛事，斯波監事，野村部員の六氏出席せられたりと。

と伝えている。また，『教海一瀾』517 号（明治 45 年 7 月 1 日発行）彙報欄（p.21）は，橘の東京での講演について，

◎東京における橘氏の講演會　猊下御東上に際し隨行の橘瑞超氏は，客月十七日夜は地學協會に於て探檢談を試みられ發掘物の一部を來會者の觀覽に供し翌十八日夜は神田青年會館に於て，國民新聞社の主催に依り探檢講演あり，何れも來聽者滿堂立錐の餘地なく頗る大盛況を極めたりと云ふ

と紹介している。また，『教海一瀾』517 号彙報欄（p.19）によると，第 4 回布教研究会発会式及び第二，第四，第五總班尊号授与式に臨席のため東上していた光瑞が，橘以下数名とともに 6 月 19 日に帰山したことを伝えている。「書簡 1」第一葉の 1 行目から 2 行目にかけての部分に橘の東京公演について言及されていることから，「書簡 1」が記されたのは，橘帰国後の 6 月 19 日以降と思われる。さらに，この年の 7 月 30 日に明治天皇が崩御していること，「書簡 1」の便箋に「明治四十　年　月　日」の印字があること，先述の「書簡 1」冒頭の橘の動向を伝える部分で「特ニ十七八両日」と月の省略があること，書簡の発信が 7 月であれば「客月」と表現されるであろうこと，以上の諸点を合わせ考えると，「書簡 1」の発信は 6 月 30 日までの期間に限定してよいと考える。

「書簡 1」で言及されていることの大半は，トルコ語（ウイグル語）の研究が急務であり，そのためにトルコ語を母語とする人物の日本への招聘するための方策が指示されており，末尾では古文書の蒐集も指示されている。特にトルコ語の学者の招聘に関しては，具体的な候補者の名前なども言及されており，この時期，光瑞にとって中央アジア研究をめぐって大きな関心事であったのは，トルコ語資料の研究であったといえよう。

そもそも光瑞のウイグル研究に対する関心は，明治 41（1908）年の段階で見られる。明治 41 年 12 月 6 日，史学研究会総会が本派本願寺で開催され，白書院において「予の歴史研究に就て」と題する光瑞の講演が行われた。同日には黒書院で将来品が展観されてもいる[7]。この講演の中で，光瑞は回紇に言及しているのである[8]。

「書簡 1」が何時何処で吉川の落手するところとなったのかについては，『新西域記』下巻に収載される吉川の調査記録「支那紀行」が手がかりとなる。それによると，大正元年 9 月 2 日から 6 日にかけての記録[9]に，

九月二日　月　快晴靜穩　前六時五分　六十三度

---

[7] 『教海一瀾』445 号の該当箇所は，次の通り。

◎本山に於ける史學研究會　京都文科大學を中心として京坂地方の歴史家を以て組織せられたる史學研究會は，今回猊下の御講演及び史學參考の海外古代珍品等を參觀せん目的より殊に本派本願寺に於て同總會を開催するに至りたるものなりと，一般會場は佛教大學圖書館階上にて去る六日午前九時三十分内田，内藤，富岡の大學教授を始め會員五十餘名參集し，午餐の後ち一同は本山白書院に至る猊下の「予の歴史研究に就て」の演題にて約二時間に渉る御講演あり，終りて中央亞細亞，支那，印度等より齎したる古代の石摺，彫刻物其他珍品等百種を黒書院に陳列し各員の御覽に供したり，一同散會せしは午後四時半なりき，而して梅上執行及び堀，渡邊の兩氏は同會員なりと

『教海一瀾』445 号（明治 41 年 12 月 12 日発行）p.17 より引用

[8] 大谷光瑞「東洋史の研究に就て」（『史学研究会講演集』第二冊，1909 年），芦屋市立美術博物館編『モダニズム再考　二楽荘と大谷探検隊　図録』（芦屋市立美術博物館，1999 年）p.162 参照。

[9] 吉川小一郎「支那紀行」巻二（『新西域記』下巻，有光社，1937 年）pp.627-628 より引用。

早朝學堂にモーラを訪ひ，日本に送遣の事を談ずるも，容易に應ずる色無し。前九時より老城に知縣を訪ひ，雜談數刻に及び，古城子の動亂は風説の如きに非ざるも，科不特は今や騷擾中なれば，同地より沙漠を經て北京に赴くは危險なりと云ふ。又蒙古人の襲來は虚傳なるも，一百名許り來りしは事實にして，和闐方面は兵燹の爲め，一千有餘戸灰燼に歸せりと。哈什は目下平穩に歸し，同地より送り來りし橘氏の荷物三箇は，衙門を經て入手す。

九月四日　水　快晴靜穩　前六時　六十五度

朝來，野村氏に返信を發し，又古城子知縣に書を送り，同地と北京間の交通の安危を問ひ，且つ和闐のユスプモーラに書を送る。午後一時，知縣は多くの衙役を從へて來問す。偶々大モーラの通行するあり。室に誘て歡語し，モーラ招聘勸説の前提として，日本學校の體制等を語る。約一時間の後，彼は祈祷時間に達すと云ひ辭し去る。

九月五日　木　快晴靜穩　前五時四十分　六十六度

城内の學校に大モーラを訪ひ，渡日學者の件を勸説す，漸く應ぜんとする色あるも，俸給高額の爲め，一應日本に照會の書を發す。夕，アクサカル來り雜話す。暑甚し。

九月六日　金　快晴靜穩　前六時十分　六十八度

學校に赴き，モーラを説く。

とあり，トルコ（ウイグル）人の日本招聘に尽力する様子が記されている。特に9月4日の条には，「和闐のユスプモーラに書を送る」との言及があり，「書簡1」第二葉に「ユスフ」と言及される人物招聘の指示を受けての行動と考えられる。また，これらの記事の直前，8月31日の条に

八月卅一日　土　晴　夜北疾風少雨　前二時十五分　七十四度

前三時十分出發。十九夜の月を踏み，沙漠の長風に嘯きて行く。…（中略）…雅爾湖を經て吐魯番に着せしは，零時二十分，途上の暑氣甚し。本日日本よりの書信五通，書籍三册を入手す[10]。

とあることから，「書簡1」が吉川の落手するところとなったのは，大正元年8月31日のことであったと考えてよいと思われる[11]。

---

[10] 吉川小一郎「支那紀行」巻二（『新西域記』下巻，有光社，1937年）p.627より引用。

[11] これにより，光瑞の吉川への指示は，その発信から吉川の落手するところとなるまでに約二ヶ月かかったことになる。ちなみにこの招聘活動は，その後約一ヵ月を費やし継続され，

十月二日　水　晴　前八時　寒暖計無き爲め缺記

城内の學堂に大モーラを訪ひ，渡日學生の事を交渉し，五時歸る。其の經過を橘氏に打電す。自宅より着信。

十月三日　木　晴

早朝，モーラ來り雜話す。彼と倶もに學堂に大モーラを訪ひ，更に交渉する所あり。午後一時

「書簡1」の第六葉5行目には「探検熱カ東京ニテ上騰」していることが記されるが，これについては「書簡2」の内容と深く関わるため，以下に詳説したい。なお，書簡末尾にでる孑孑は，吉川の渾名である。

「書簡2」の冒頭には，新疆の不穏が言及されている。これは勿論1911年10月10日の武昌蜂起を契機として勃発した辛亥革命に伴う動乱を意味している。本願寺周辺でもこの混乱については，『教海一瀾』などによっても屡々報道されていた[12]。この辛亥革命による混乱により，吉

半出發。途次渡日學生候補を見んが爲め，城の盜難二十淸里の所に至る。體質虛弱，眼に異狀あり。余より謝絶す。夫より勝金口に向ふ。戈壁の強風に遭ひ，夜九時着す。

十月八日　火　快晴靜穩前七時廿分　五十六度

昨夜來吐せし日本行きモーラ二名は今朝より歸來，余の宅に同宿して賑ふ。人夫十員を雇ひ，破廟發掘に着手す。前十時より監督せしが，小紙片の他所得無し。治警［巡査］經二卷を携へ來る。高價の爲め割愛す。

吉川小一郎「支那紀行」巻三（『新西域記』pp.632-633）より引用

と記されており，着々と準備が進められたが，

十月十四日　月　北疾風晴　前九時　五十一度

日本より「モーラ・バランズ待て，金送れぬ，文出した」と着電，爲めに當地付近を暫く渉獵して，其の來信を待んとす。橘氏に發信。十四夫を役し發掘するも所得無し。

吉川小一郎「支那紀行」巻三（『新西域記』p.633）より引用

とあって，日本から一時中止の指示があり，その後の吉川の記録から関連記事が見いだされないことから，計画は頓挫したと思われる。

[12] 例えば，『教海一瀾』505号（明治45年1月1日発行）彙報欄（pp.21-24）では，「淸國變亂と本派本願寺」として言及されている。以降，『教海一瀾』506号（明治45年1月15日発行）彙報欄(pp.27-28)に「淸國變亂と本派本願寺」として続報が掲載され，続く『教海一瀾』507号（明治45年2月1日発行）彙報欄（pp.27-29）にも「淸國變亂と本派本願寺」の続報があり，うちp.28には橘の動向が言及されている。以下『教海一瀾』508号（明治45年2月15日発行）彙報欄（pp.31-33）に「淸國變亂と本派本願寺」の続報，『教海一瀾』509号（明治45年3月1日発行）彙報欄（pp.29-30）に「淸國變亂と本派本願寺」の続報，『教海一瀾』510号（明治45年3月15日発行）彙報欄（pp.43-44）に「淸國變亂と本派本願寺」の続報，『教海一瀾』511号（明治45年4月1日発行）彙報欄（pp.37-38）に「淸國變亂と本派本願寺」の続報が掲載され，『教海一瀾』512号（明治45年4月15日発行）社説欄には「臨時部の閉鎖」（p.2），彙報欄（p.17）に「臨時部の閉鎖」の記事が見出される。当時大陸布教を進めていた本願寺にとって，清国の混乱は看過できない重大事件であった。なお，辛亥革命について吉川が知るところとなったのは，明治44年12月のことである。「支那紀行」によると

十二月二日　土　快晴　高廿七度　低十八度

前八時十分，二十度，今朝は寓主と阿彌陀洪と四人卓を圍み，李の作りしオムレツに腹を肥やす。…（中略）…晩景より復た腰痛を感ず。余の意を知らず衆人喋々喃々す。偶々衙門より使丁來り書を齎らす。鄉信ならんと急ぎ開封せば，何ぞ知らん余が日本に發せし書信を返戻せるものにして，別に電信局長の書狀あり。云ふ，陝西以東大革命蜂起り，郵電全く不通。此の亂は淸曆九月七日より始まるも，何の日に終熄するを知らずと。余を以て視るに革命の是非を知

川は帰国する大正3年（1914）に至るまで，各地で混乱を経験するのである。

「書簡2」の第一葉は，続けてその殆どを割いて日本からの探検隊について言及されている。この日本探検隊云々の言及は，当時日本において調査隊を別途派遣しようという動きがあったことが意識されている。

明治41年（1908）11月から12月にわたったヘディンの来日が，その後各方面に影響を与えたことは，すでに先行研究で指摘されている[13]とおりであるが，その一連の影響のなかで別途探検隊が組織されようとしていたことについては，あまり言及されていないように思われる[14]。明治41年から大正1年（1912）のある時期に，ヘディンの事蹟に感化され，そしておそらくは当時第二次・第三次の調査を行っていた橘の活躍などもあって，日本では新疆調査に対する関心が高まっていた。これについて，第一次隊メンバーの渡邊哲信が，後に『邊疆支那』誌上に当時を回顧し言及している。

> ヘデン博士の我國に於ける講演は各種の方面に影響を與へた，西域の探檢や同地方考古學的研究は眞先に日本が爲す可き仕事である。西域の文化は支那を經て我國に傳り居り同地方より發掘せらるる貴重の古文書には漢字のもの多く，日本人は歐米人に比してより多く研究上の利便を有す，然るに是迄我國人が之を等閑に附し去りしことは誠に遺憾至極のことである。遲蒔ながらも探檢隊を組織して西域探檢の學界に侵入せねばならぬと主張する者が出來た。其第一聲を放つたのは志賀重昂氏である。私が益田孝男其他の實業家の依頼に應じて，築地精養軒に於て新疆談を試みし席上のことであつた。實業家連は卽座に賛成して探檢費の募集に應ずることを約し，在席であつた牧野伸顯子は官邊に交涉して便宜を要請すること，特に在支公使伊集院男に對しては支那側の保護方を依頼することを擔當された。其後此談は漸次具體化し，東大の御殿に數回の會合を催し，内藤湖南博士の如きは特に會合に列する爲めに京都より東上せられた程であつた。小生は此準備の相談役として毎會列席した。然るに支那に於て突然革命發し，清國政府は西域遠征隊に對して保護の責任をとらぬと申出すに至り，此折角の計劃も畫餅に歸するに至つたことは遺憾のことである[15]。

らず。唯速かに和平に歸せざれば，故國の聯絡を如何せん。若し橘氏の消息なほ二ケ月も不明ならば余は財嚢を拂ふに至らん。

吉川小一郎「支那紀行」巻二（『新西域記』p.587）より引用

と記されている。

[13] 例えば，高本康子『近代日本におけるチベット像の形成と展開』（芙蓉書房出版，2010年）や白須浄真編『大谷光瑞とスヴェン・ヘディン—内陸アジア探検と国際政治社会—』（勉誠出版，2014年）などを参照。

[14] 但し，1986年に早くも片山章雄氏がこれについて言及している。片山章雄「大谷探検隊関係記録拾遺V」（『季刊　東西交涉』'86冬号（井草出版，1986年）pp.32-33参照。これについては片山章雄氏よりご教示を得た。特に記して謝意を表したい。

[15] 渡邊哲信「支那邊疆問題と日本の關心」（『邊疆支那』1巻2号，邊疆問題研究所，1934年5月発行，pp.9-14）pp.10-11より引用。

これによると，調査を首唱したのは志賀重昂[16]であり，益田孝[17]や牧野伸顕[18]，伊集院彦吉[19]，内藤湖南を巻き込んでの事業として計画されたことが知られる。しかしその後辛亥革命が起こったことにより，計画が頓挫してしまったという。この時期の中国調査に対する関心は，『東亞研究』でも言及されている。

○地學協會の新計畫

東京地學協會にては此度三箇年を期して支那の學術的調査を爲す事に決定せり支那の近世科學的叙述に就ては英佛獨露等の人士の之を行ひしもの少なからず既に出版せられたる圖書も乏しからざるに拘はらず支那に對して最密接の關係ある我邦が殆んど手を之に染めざるは科學上の一大缺陷と云ふべし況んや支那は疆土の廣漠に加ふるに文明の淵源の甚だ遠きものあるに於ては此際大に之が調査を試みざるべからずとの理由にて同會は昨年來會員石井理學士一人を特派し爾來專ら揚子江沿岸の科學的調査に從事せしめつゝあり其の結果最早若干の資料を得たれば目下報告の編纂中なれど尚ほ調査を要する事柄極めて多く更に十分の計畫を要するを以て同會の責務として支那の古書と西洋の近著とを參照し之に本邦人の蒐集せる材料を加へ旅行家探險家並に商工業に就ての研究家に向つて絶好の指針たるべき地學關係書籍及び地圖を發行し清國を科學的に解説する見込なりと云ふ[20]。

ここでは，東京地学協会が 3 年計画で中国調査を計画しており，それに先だって中国南方地域で

---

[16] 志賀重昂（1863–1927）明治から大正時代にかけて活躍した地理学者。三河（愛知県）出身。札幌農学校（現北海道大学）卒。号は矧川（しんせん），四松庵。三宅雪嶺らと雑誌『日本人』を発行し，国粋保存を主張した。明治 28 年東京専門学校（現早稲田大学）教授。35 年衆議院議員（当選 2 回，政友会）となる。世界をめぐり，啓蒙的地理学書を著した。著作に『日本風景論』『世界山水図説』などがある。『志賀重昂全集』は国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧が可能である。（『日本人名大辞典』参照）

[17] 益田孝（1848–1938）明治から昭和時代前期にかけての実業家。佐渡（新潟県）出身。号は鈍翁。文久 3 年幕府の遣欧使節に随行，維新後横浜で貿易商を営む。明治 9 年三井物産社長に就任し，22 年三池炭鉱の払い下げをうけ三井鉱山を設立した。のち三井家同族会管理部の専務理事，三井合名の顧問となり，三井財閥の発展に尽くした。1918 年男爵。茶人，美術品収集家としても知られ，本願寺本三十六歌集の切断に関わったことでも知られる。（『日本人名大辞典』参照）

[18] 牧野伸顕（1861–1949）明治から昭和時代前期にかけての政治家。薩摩（鹿児島県）出身。大久保利通の次男。吉田茂の岳父。遠縁の牧野家の養子となった。外務省に入り，駐イタリア公使などを勤める。明治 39 年第 1 次西園寺内閣の文相となり，義務教育の 4 年から 6 年への延長などに尽力した。のち枢密顧問官，農商務相，外相，パリ講和会議全権，宮内相，内大臣を歴任した。1920 年子爵。著作に『回顧録』がある。（『日本人名大辞典』参照）

[19] 伊集院彦吉（1864–1924）明治から大正時代にかけての外交官。薩摩（鹿児島県）出身。妻芳は大久保利通の長女。釜山領事，天津総領事などを勤め，明治 41 年清国公使となる。大正 5 年イタリア大使となり，8 年パリ講和会議の全権委員を勤めた。11 年関東長官，翌年第 2 次山本内閣の外相となった。（『日本人名大辞典』参照）

[20] 『東亞研究』第 2 巻 4 号（東亞學術研究会，1912 年 4 月発行）彙報欄（p.83）より引用。

調査が行われつつあることを伝えている。この記事では新疆調査については言及されていないが，続く『東亞研究』2巻5号では，

○中央亞細亞の踏査

志賀重昂氏等首唱となり東京々都兩帝國大學及び慶應早稲田兩私立大學諸教授其他の賛同を得て先年來中央亞細亞踏査事業着手の準備に盡力し前内閣當時當局者の承認をも經たりしかど愈公然の發表をなす迄には事業費として尠くも五萬圓以上を要する見込にて爾來基金募集中の處其額既に四萬圓餘に達したり而も不足額一萬圓は未だ容易に纏まらず斯くては甚だ遺憾なればとて志賀氏は自ら進んで其著書數種の賣上げ全部を之に充てんと決心し各方面に向つて熱心運動中なりと云ふ因に同事業は全然學術的のものにして何等政治的意味を有せずと[21]。

とあって，志賀重昂が首唱した新疆調査が計画されつつあり，すでにその資金も集められつつあることが記されている。光瑞が「書簡2」で言及する日本探検隊は，この志賀重昂の計画を指していると考えられる。

「書簡2」が何時書かれたものであるのかについては，第一葉9行目から10行目に「本年度ノ探検區域ハ橘ト相談ノ結果左ノ如ク定ム」とあることから，橘の帰国後「書簡1」が記された後，大正2年（1913）初め乃至同年度初めのことと思われる。このことは第五葉1行目に「学者ノ件ハ橘カツレテ帰ラサリシ為」とあること，軸装されている前後関係からも裏付けられるように思われる。但し，「書簡 2」が何時何処で吉川の落手するところとなったのかについては，残念ながら判然とはしない。「書簡 2」の内容は，その大部分が当該年度の調査旅程についての指示となっている。これによれば光瑞は，ウルムチから天山ボグド峰の探査を終えた後，ジムサール・トルファン間での唐代の交通路を探り，その後はハミに出て越年し，再びトルファンに出るべきことを指示しているが，吉川の大正2年から大正3年にかけての調査活動は，この「書簡2」の指示内容と異なっているのである[22]。むしろ「書簡 2」に指示されている調査旅程は，橘が日

---

[21] 『東亞研究』第2巻5号(東亞學術研究会，1912年5月発行)彙報欄（p.78）より引用。

[22] 第三次探険での吉川の調査旅程を，「支那紀行」によって辿ってみると，以下の通りとなる。

上海（M44/5/31着6/16発）→漢口（6/19着6/23発）→鄭州（6/23着6/24発）→洛陽（6/24着6/25発）→西安（7/6着7/14発）→蘭州（8/2着8/12発）→涼州（8/19着8/21発）→甘州（8/27着8/29発）→粛州（9/3着9/7発）→安西（9/14着10/3発）→敦煌（10/5着M45/1/26合流2/6発）→安西（2/8着2/23吉川発3/3橘合流）→ハミ（3/4着3/7橘発3/10吉川発）3/17合流→トゥルファン（4/3/着4/7発）→ウルムチ（4/10着4/26橘発日本へ5/5吉川発）→トゥルファン（5/8着6/20発）古城子（6/26着6/28発）済木薩（6/28着7/5発）→天山調査→ウルムチ（8/18着8/28発）→トゥルファン（8/31着12/19発）→ウルムチ（12/23着T2/2/5発）→トゥルファン（2/8着2/11発）→コルラ（2/22着2/25発）→クチャ（3/5着5/24発）→アクス（6/13着6/21発）→カシュガル（7/6着7/30発）→ヤルカンド（8/3着8/6発）→ホータン（8/14着9/12発）→アクス（9/26着9/30発）→イリ（10/13着11/2発）→ウルムチ（11/20着T3/1/5発）→トゥルファン（1/8着1/17発）→ハミ（1/29着2/4発）→敦煌（2/13着2/24発）→鎮番（3/10着3/18発）→包頭（4/20着4/27発）→帰化城（4/29着5/1発）→張家口（5/5着5/14発）→北京（5/14着）→長崎（7/7着）→京都（7/10

本に帰国するためにウルムチを出発した明治45年（1912）4月以降8月中旬までの期間に行われた調査の方が符合するように思われる。日本との書簡の遣り取りについても「支那紀行」の大正2年初以降の記事に散見されるが，「書簡2」の着信記事として限定することは困難である。よって，「書簡2」を吉川が落手した時期についても，大正2年（1913）初め乃至年度初め以降のいずれかの段階とするほかないように思われる。

5．おわりに

以上，本稿では，龍谷大学図書館に保管される「【寄託本】　大谷光瑞師書簡」について，その内容を紹介し，その発着時期や言及される内容について検討を加えた。

従来，大谷探検隊の調査については，各隊員に光瑞からの指示が逐次伝えられ，調査が展開されたとされてきた。そしてその際，逐次指示が与えられた根拠として言及されるのは，光瑞が隊員に対して与えた『旅行教範』であった。しかし，『旅行教範』は，あくまで隊員への調査遂行上の注意事項，指示要項を記録したハンドブックとして与えられたものであり，調査に従事する隊員たちに逐次与えられた指令書・指示の書簡ではない。このため，調査従事中の隊員に具体的に光瑞からどのような指示が逐次与えられていたのかについては，必ずしも明らかではなかった。今回，吉川小一郎に宛てられた「書簡1」「書簡2」の内容が確認されたことにより，第三次調査当時，光瑞の指示が具体的にはどのような内容を含んでいたのか，どのようなタイミングで隊員たちに伝えられていたのか，光瑞の学的関心がどのような点にあったのかが具体的に判明したことは，大きな意味があるといってよいと思われる。また，従来はあまり指摘されることはなかったが，明治末期から大正初期にかけての時期に，ヘディン来日を契機として，日本の研究者たちの間で中央アジア探険の機運が高まりつつあり，この書簡の内容や第一次調査に参加した渡邊の回想談により，当時のそのような学界の動静に直接また間接に大谷探検隊の活動が少なからず影響を及ぼしていたことを確認することができたことは，意義深いといえよう。「書簡1」「書簡2」ともに，文言はいささか過激にすぎる部分も散見されるが，それは一面で光瑞の斯学を牽引したいという強い意志の表れと理解することができよう。

着）

なお，光瑞から吉川に宛てられた探検指示については，「大谷光瑞筆　中央アジア探検指図書」がある。吉川の調査行動は，この指図書に従っていることが確認できる。山田信夫「復刻　新西域記　上・下巻　解題」（『復刻　新西域記』（井草出版，1984年）附録，pp.22-23），前掲『モダニズム再考　二楽荘と大谷探検隊　図録』p.34参照。